

歴史コーナー常設展示 ―古文書をよむ―

## 種田山頭火と八代 ～昭和5年自筆書簡を中心に～

種田山頭火(1882-1940)は山口県出身の俳人です。東京の萩原井泉水が主宰する雑誌『層雲』に多くの作品を発表し、自由律俳句の世界で活躍しました。

しかし、その人生は波乱万丈。大正5年(1916)家が破産し、妻子を連れて熊本へ移住。古書店や額縁店を営むものの空虚感を強めた山頭火は、大正8年(1919)妻子を残して単身上京します。その後、大正12年(1923)熊本に戻り、大正14年(1925)には出家得度して味取観音堂(植木町)の堂守となります。しかし、それも長く続かず、翌年より西日本各地へ行乞の旅に出ました。

昭和4年(1929)末、山頭火は熊本に戻り、そのまま昭和5年を迎えました。このとき山頭火、48歳でした。

### 昭和5年(1930)9月 山頭火、八代・日奈久へ

昭和5年9月、山頭火は再び放浪の旅に出ました。その記録(『行乞記』)には「愚かな旅人として放浪するより外に私の生き方はない」と書いています。この旅で山頭火が最初に訪れたのが八代でした。

9月9日、汽車で八代着。宿は萩原塘吾妻屋。

9月10日、午前八代町で行乞。午後に日奈久へ移動。宿は日奈久織屋。

この日の『行乞記』に、「温泉はよい、ほんたうによい、こゝは山もよし海もよし」と記述。

山頭火は13日に日奈久から佐敷へ移動。その後、人吉、都城、宮崎、湯布院、門司、福岡と巡り、同年12月に熊本に帰りました。

この解説シートでは、山頭火が八代と宮崎京町(えびの市)から熊本の句友・友枝寥平へ宛てたハガキを紹介します。

No3 種田山頭火書簡 昭和5年(1930)9月10日 種田山頭火自筆 友枝寥平宛 <まもと文学・歴史館所蔵>

<ハガキ表> (消印「八代/5.9.10/后0-3」)

熊本市米屋町一

友枝伴蔵様

旅の 山生

<ハガキ裏> (本文)

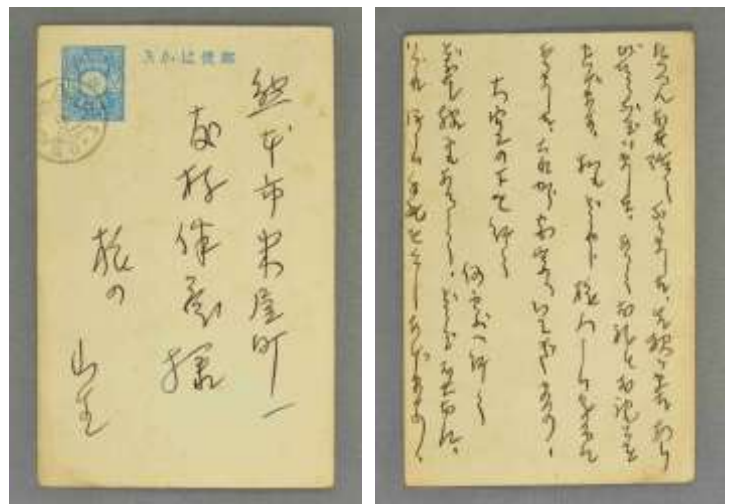
たいへんお世話になりました。先夜ハまたありがたうございました。あつくお礼とお詫ひを申上げます。私もどうやら旅人らしい気分になりました。これから宮崎へいそぎます。

大空の下を行く

何処へ行く

どなた様にもよろしく。どうぞお大切に。

いづれ詳しい手紙をさしあげます。



熊本の句友・友枝寥平に宛てた山頭火の自筆ハガキです。消印から、昭和5年9月10日の八代滞在中に出されたものとわかります。「先夜ハまたありがたうございました」「私もどうやら旅人らしい気分になりました」という文言からは、旅を始めたばかりの高揚感と、寥平への親しみ・信頼感がうかがえます。

注目すべきは、ここに記されている「大空の下を行く何処へ行く」という句。これは『行乞記』に記述はなく、このハガキにのみみえる「山頭火が八代で詠んだ幻の句」です。

しかし、この日の夕方、日奈久から他の句友(木村緑平)に宛てた別のハガキには「炎天の下を行く何処へ行く」という句に修正されています。八代では「大空の」、日奈久では「炎天の」、この2つの表現の違いは、この日の山頭火に何らかの心境の変化があったことを示していると思われます。

<ハガキ表> (消印「門司吉松間」/5.9.17/[ ])

熊本市米屋町一  
友枝寥平様  
宮崎縣京町にて  
山生

九月十七日

<ハガキ裏> (本文)

おかへりないでせう。人吉でおたよりに接しえかったのハ  
だいぶ不平でした。此次ハ都城局。おはがき一本おた  
のみいたします。旅でハそれが何よりのよろこびであります。  
こゝハずゐぶん山の町で一実ハ村に過ぎませんが一初めて  
諸焼酎なるものを味ハいました。そしてプロの飲料としてハ悪  
くないと知りました。しかし私ハあれからあまり飲みません。

寝ころべば露草だった

いづれ行乞記を書きます。九州と層雲とで発表して

いたゞきますつもり。何といつても行乞ハ辛い。いづれも遠からぬうちに、  
熊本附近ニおちつかなければなりません。どうぞお切に。

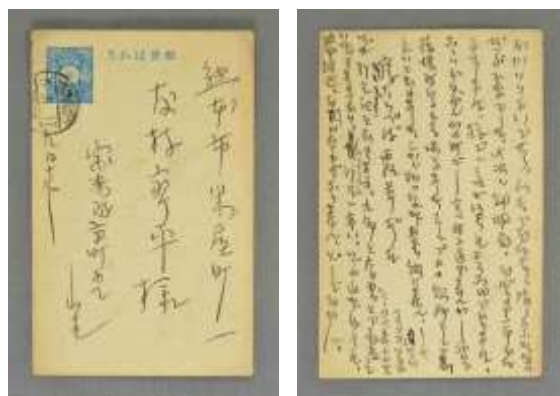
「先日の句を訂正して、

炎天の下を

何処へまで

行く」

(「 」部分は天地逆)



熊本の句友・友枝寥平に宛てた山頭火の自筆ハガキです。消印から、昭和5年9月17日に宮崎県京町(現えびの市)から出されたものとわかります。

この中で山頭火は「人吉でおたよりに接しえかったのハだいぶ不平でした」と寥平に愚痴をこぼしており、改めて行く先々への返信を求めています。単身行の旅とはいえ、人とのつながりを強く求める山頭火の姿がよくうかがえます。

注目すべきは、真ん中下部に上下反転で小さく記された「先日の句を訂正して、炎天の下を何処へ行く」の記述。「先日の句」とは9月10日付書簡に記した、山頭火が八代で詠んだ句「大空の下を行く何処へ行く」を指します。わざわざ反転して追記してまで、句の修正をアピールしているところに、作品に対する強いこだわりが感じられます。

結果的にこの句「炎天の下を何処へ行く」は、山頭火のお気に入りとなったようで、この年の『層雲』にも投稿されました。

【展示リスト】 展示期間 令和元年(2019)9月3日~29日

特別協力 くまもと文学・歴史館 熊本県立図書館 九月は日奈久で山頭火実行委員会

| No. | 名称         | 形状・宛名・年代                      | 数量 | 所蔵         |
|-----|------------|-------------------------------|----|------------|
| 1   | 種田山頭火書簡    | 自筆葉書 高木味々宛 昭和5年(1930)4月7日     | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 2   | 火山会書簡      | 山頭火ら寄書葉書 白石基宛 昭和5年(1930)4月13日 | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 3   | 種田山頭火書簡    | 自筆葉書 友枝寥平宛 昭和5年(1930)9月10日    | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 4   | 種田山頭火書簡    | 自筆葉書 友枝寥平宛 昭和5年(1930)9月17日    | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 5   | 種田山頭火書簡    | 自筆葉書 友枝寥平宛 昭和5年(1930)9月23日    | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 6   | 種田山頭火書簡    | 自筆書簡・額装 友枝寥平宛 (年月不明)7日        | 1通 | くまもと文学・歴史館 |
| 7   | 「しきりに」句短冊  | 山頭火自筆 句作：昭和5年(1930)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 8   | 「岩かけ」句短冊   | 山頭火自筆 句作：昭和5年(1930)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 9   | 「笠も」句短冊    | 山頭火自筆 句作：昭和6年(1931)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 10  | 「落葉の」句短冊   | 山頭火自筆 句作：昭和8年(1933)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 11  | 「柳ちる」句短冊   | 山頭火自筆 句作：昭和9年(1934)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 12  | 「庵は」句短冊    | 山頭火自筆 句作：昭和9年(1934)           | 1枚 | くまもと文学・歴史館 |
| 13  | 「濁れる水の」句短冊 | 山頭火自筆 句作：昭和15年(1940)          | 1幅 | 八代市立博物館    |